論文「苗族における伝統社会の変遷とアイデンティティ―貴州高坡苗族を中心に―」概要書

張　勝蘭

「苗」は中国の漢字文献にあらわれる最も古い民の一つとされ、かつて中国南部の非漢人に対する総称でもあった。明代以来、中国王朝による西南地域の統治が深く入り込むにつれ、色々な「苗」グループが記録されるようになり、民国期まで継承されていた。そして、中華人民共和国成立後、内部に全く異なるグループを抱えているにもかかわらず、「民族識別」が行われる前に一つの少数民族として認知され、いち早く「苗族」と識別された。現在、同系統の人々は東南アジア、アメリカ、フランスなどにも広く分布しているが、中国国内の苗族は、内部の多様性を保とうとしながら、識別された「苗族」としてのアイデンティティとそれぞれのサブグループアイデンティティを重層的に再構築している現状にある。

このような苗族及び苗族アイデンティティは一体どのように形成されてきたのか。そもそも苗族とは何か。その独自性はどのように生成・維持されてきたのか。そして、内部に存在する様々なサブグループから生じる苗族の多様性をどのように理解すべきなのか。本論文の目的は、上記の問いにサブグループ次元で通時的かつ具体的に検討することで答えることである。そして、それを通じて、中国南部非漢人社会の多元性を解明する可能性について展望したい。そこで本論文では、序章・付論・終章を含む八章にわたり当該問題に関する検討を進める。

序章では、苗族とは何か、何故現在においても重層的な「苗族アイデンティティ」を再構築しつつあるのかを究明するために、苗族がどのような歴史プロセスを経て、今日に至ったのかを再検討すべきである。具体的には、識別された「苗族」及び内部に存在する様々なサブグループ、すなわちその独自性と多様性が形成された歴史文脈を理解しなければならないことを本研究の問題意識とする旨を述べた。

「苗」はその内実が極めて複雑で多様であったにもかかわらず、漢文化の文脈において、一つの非漢人集団を指す記述として定着するようになった歴史的経緯があるため、「民族識別」が行われる前にいち早く一つの「苗族」として公認されたのである。また、漢字文献による「苗」という記述は、初めて現れた秦漢時代から近代まで、その意味合いも指す内実も大きく異なっているが、常に漢と対立する「非漢」的存在とされてきた。これは漢字文献における「苗」の記述が「苗」・「漢」の「境界」を成していることを表しており、また中国王朝・漢人社会との関係がその独自性の形成を大きく左右してきたことを意味する。一方、苗族の内部にはかなり異なる伝統文化を持つサブグループが数多く存在しており、それぞれのサブグループアイデンティティの高揚も見られ、苗族の多様性が一層目立つこととなっているのである。

従って、苗族と中国王朝・漢人社会との関わりに焦点を当て、それが個々のサブグループ（地域集団）に与えた影響を検討し、更にその影響によるサブグループの伝統社会・文化の変遷を考察する必要がある。また、サブグループ次元で検討する場合は、特にその地域社会

と密接に関わる末端土司の統治を通して、中国王朝・漢人社会との関わりを読み取らなければならない。

そして、上記の課題を検討するにあたり、関連の先行研究を整理した。

まず、中国の苗族の形成を考える際に、「nation,nationality,ethnos」に対応する「民族」、及び「ethnicity」・「ethnic group」に対応する「族群(性質)」・「エスニックグループ・民族集団」の議論を踏まえて、従来の「客観的文化特徴論」より、特に「境界論」、「工具論」、「原初論」に基づいて総合的に検討すること、またアイデンティティについて、「歴史記憶」、「三つの意識モデル」、「他者のまなざし」の視点を取り入れて考察すべきことを述べた。

次に、苗族及び高坡苗族の先行研究をまとめた上で、以下の問題点を指摘した。すなわち、苗族には文字がなく、また殆どのサブグループに関する漢文史料が不足しているため、これまで日本を含む海外の苗族研究の多くは、人類学・民族学の手法に基づくもの、また歴史学の視点から苗族全体あるいは広範囲の地域に対する検討である点である。他方、中国国内において、総体的な研究が盛んに行われてきたが、苗族を構成するサブグループを強調する研究は苗族の分断に繋がりかねないとされてきた。総じて言えば、苗族におけるサブグループ次元の変遷を考察する研究が十分に行われてきたとは言えない。

そのような状況の下で、本論は高坡苗族にフォーカスした。高坡苗族及びその統治に関わった大小土司の史料記載は比較的詳細で連続性があり、また土司統治の影響による伝統社会の変遷の現れも特徴的だからである。そして、文献史料の歴史学的検討、及びその伝統社会に対するフィールド調査データの文化人類学的分析を研究方法とする。つまり、時間・過程を重視する歴史学と空間・構造を重視する人類学を結合させた「歴史人類学」的研究手法を用い、一種の民族地域史的視点から、通時的かつ立体的に考察することである。

また本論文は中国王朝・土司・漢人との関わりという切口から苗族について検討するため、苗族がその関係性により「熟苗」・「生苗」と大別されていた点から考察する。すなわち総合的に検討するために、「熟苗」の高坡苗族と併せて、さらに「生苗」の貴州東南部の中部方言集団を事例に、その伝統服飾文化を切口に考察を加える。

第一章「漢字文献における「苗」の記述と苗族アイデンティティ形成の歴史背景」では、「苗族」の認知・識別・構築にとって、重要な背景である漢字文献にある「苗」という記述について検討した。それによって、先秦時代の「三苗」などの語は、宋代以後「苗」として再登場し、明清期に亘って、拡大・細分化する「苗」という「境界線」を作り出し、苗族アイデンティティ・各地域の苗族アイデンティティの形成に大きな影響を与えたことを明らかにした。

具体的には、「境界」・「歴史記憶」・「他者のまなざし」・「意識モデル」などの文化人類学、歴史人類学的視点を取り入れて通時的に考察すると、①秦漢時代までは、「三苗」は「華夏帝国」の境界を維持するための「非華夏」という存在である。これは後に「非華夏」集団にとって「漢に敵対した」歴史記憶となって、特に苗族の「意識モデル」の中の「漢と敵対し、

かつ匹敵する力を持っていた」という祖先像作り、すなわち苗族の歴史の再編成に大きく影響を及ぼした。②南宋からは南部開拓により、宋・元代の文人は「猫」と称する集団を「三苗」と結び付け、「苗」という「境界」が登場した。これが「外部者観察モデル」の一部として徐々に形成された。③特に元代から土司制度の実施、「苗軍」の出現により、中央集権の中国王朝（国家）の概念が徐々に浸透し、それが歴史記憶の一部として「中国王朝の中のわれわれ」と意識する部分となり、今日の苗族の形成と繋がっているのである。④明清期は今日の苗族・苗族サブグループに関する認識・定義にとって重要な時代である。明代に入って、西南地域に対する本格的な統治と共に、王朝支配において様々な非漢人を正確に識別する重要性が徐々に認識されるようになり、「苗」の記述も更に細分化された。貴州を中心に見てみると、『大明一統志』が編纂されて以来、官撰の地方志から「百苗図」に代表される一般著作まで「苗」をはじめとする非漢人の分類記述は、中国王朝の「まなざし」及びそれとやや異なる地方官や文人による「まなざし」を系統的に文字化・図像化したものと言える。それによって、サブグループとしての「外部観察者モデル」が確立されてきたのである。中でも「百苗図」の存在は、それらのサブグループの「外部観察者モデル」を民間・海外にまで広げた。その結果、苗族内外において、「苗族」・「苗族サブグループ」の認識・定義に繋がり、特に苗族にとっては、サブグループとしての意識を再確認し、それぞれのアイデンティティの強化にも繋がった。同時に、その反対側にある「苗族」というカテゴリーも再考させられたと論じた。

苗族及びそのアイデンティティの形成・変遷について、中国王朝・漢人社会の影響を漢字文献から検討してきた。しかし、苗族の伝統社会は具体的に中国王朝とどのように関わり、つまりその統治下の政策によりどのように変遷してきたのか。これについては第二章で考察した。

第二章「清朝の対「苗」政策と「苗」伝統社会のリーダー―苗族アイデンティティの重層性の再考―」では、「苗」が居住する「苗疆」に対して、本格的に大規模な改土帰流を実施し、直接統治を強化した清朝に力点を置いて検討した。すなわち、改土帰流・保甲制度・苗官制などの対「苗」政策の中において、「苗」伝統社会のリーダーが主に清王朝とどのように関わってきたのかを検討し、「苗」の伝統社会組織の変容及び苗族アイデンティティの構築への影響を明らかにした。

中国王朝の統治が本格的に苗族の内部社会に入り込むようになる明清期に、中国王朝（国家）・土司・漢人と「苗」との関係において、媒介者となったのが「苗」伝統社会のリーダーである。「苗」伝統社会のリーダーは、宗教信仰の空間、日常生活の空間に交錯的に複数存在したため、中国王朝はこれらの内部のリーダーに対して、厳密に区分して利用したわけでなく、その時の状況に応じて、リードできる者を選出した。そのため、明清期に改土帰流・保甲制度・苗官制などが実施された結果、「頭人」、「郷老」、「理老」のような苗族内部のリーダーを通して、苗族の伝統社会組織が中国王朝の政治体制と複雑に絡むようになってきた。彼らの動向はその内部社会に大きな影響を与え、重層的な苗族アイデンティティの構築

にも深く関わった。

各時期に実施された政策との関わりを見ていくと、①清代初期、「苗」伝統社会のリーダーの一部は、最初の段階では内部社会の治安を維持する司法権力者として、官吏体制に組み込まれ、その伝統的司法権力も削減されていた、②清代中期、「苗」伝統社会のリーダーの中に村落を取りまとめ、清朝政府と「苗」の接点にあって、媒介的役割を果たし始めた者が現れた。改土帰流後、保甲制度が広く導入されることによって、「頭人」などの選出が官の承認が必要になってきた所が多くなり、その性格は少しずつ変わっていった。一方、慣習法が重要視され、「理老」のようなリーダー的存在が依然として重要な役割を果たしていた、③清代中後期、苗官制の導入によって、「苗」伝統社会のリーダーが名目上世襲のない土司に転身する者も多かった。特に道光後期から「頭人」などは徐々に「苗」の統治に関する重要な政策の実施と関わるようになり、土弁の代わりになる場合もあり、「官」的な性格が一層強まっていった。

結果的に、中国王朝の介入により、段階的に「官」の性格を持つようになったリーダーと伝統的価値観を保っているリーダーが共存するようになった。言い換えれば、清朝の政治体制内のエリート層と伝統社会内部のエリート層の存在が、中華文明という文脈における「苗」というアイデンティティの形成とそれぞれの地域的なアイデンティティ形成に大きな影響を与えたと結論づけた。

では、第一章と第二章で論じた二つの背景のもとで、サブグループ次元では、苗族の伝統社会の変遷とアイデンティティはどのように表出したのか。これについては、第三章以降貴州中部における代表的なサブグループ—高坡苗族を事例に具体的に検討した。

高坡苗族は貴州の政治・経済・文化の中心地に分布し、同化圧力が高かったにもかかわらず、現在でも伝統文化の同一性をよく保っているように見える。しかし、実際に主な聚居地である高坡郷一帯には「卡上」と「卡下」という顕著な文化的境界線が存在しており、それぞれの区域に対応する祖先祭祀や年中行事等の伝統文化の違いが見られる。またそれぞれの区域に合わせるかのように、明清以来の土司統治が大きく変化したことが確認できる。

第三章「中曹謝氏土司から見る貴州高坡苗族伝統社会の変遷—「卡上」地域—」では、この高坡苗族の「卡上」地域において、明清期以来彼らを統治してきた主な末端土司の中曹長官司長官謝氏に焦点を当て、中国王朝及び周辺の土司との関係が変化する中で、その勢力の消長が高坡苗族の伝統社会や伝統文化にどのような影響を与えたのかを検討した。

すなわち、まず中国王朝の介入過程を整理すると、元代から貴陽一帯に行政区域が設置され、貴陽一帯の「苗蛮」は招撫されるようになった。数多くの非漢人を管理するために、設置された宣慰司から蛮夷軍民長官に至るまでの大小土司は明清まで受け継がれた。高坡苗族は元代の土司制度の実施と共に、「熟苗」化が始まり、早くから異なる土司を介して中国王朝との政治的な関係が生じていた。その上に大小土司が多重的な「他者」として、様々な政治的「境界線」をもたらし、それによって異なった政治・経済空間が生まれ、そのような空間の分割が高坡苗族の伝統社会と文化に差異をもたらした。特に明代の

衛所の設置、駅道の開通によって、「哨」・「塘」（「卡」）などの軍事的拠点が置かれ、目に見える居住空間の分割も更に進んでいった。

次に土司の変遷について、中曹謝氏を中心に見てみると、謝氏は元代から貴陽辺りにいた「土人」である可能性が高いが、明朝との朝貢関係を保ちながら、徐々に漢化された。明代の謝氏は水東宋氏及び水西安氏と微妙な同盟的関係を保ち、特にイ族の水西安氏の影響を受けたが、明末になると、水西・水東との関係が「奢安の乱」によって大きく変わった。謝氏は宋氏に代わって高坡郷一帯を直接統治するようになり、安氏と対立的な立場となった可能性が高い。清朝雍正年間の改土帰流により、貴陽府直属となった謝氏の漢化は更に進んだ。そして、徐々に「卡上」を中心に管轄するようになり、民国期までその影響力が維持されていた。祖先を漢人に持つことを主張している「卡上」の中曹副長官劉氏も、清雍正七年に外委土千総に降格され、劉氏及びその管轄区の漢化も更に進んでいった。要するに「卡上」は全体的に漢文化の影響が早く、かつ大きかったと考えられる。

つまり、「卡上」は明代以前からイ族土司から多くの影響を受けたが、清代に貴陽府に直属するようになり、更に漢化された謝氏を中心とする統治へと変わり、その後一つの政治空間として保たれた。「卡上」の祖先祭祀において、「イ」的要素から「漢」的要素に切り替えていく部分が多く見えること、「漢」文化との繋がりを強調する吃新節を祝うことなどは、こうした土司統治の変遷がもたらした影響の大きさを物語っていると論じた。

では、「卡下」の場合はどうなのか。これについて検討したのは第四章である。

第四章「青岩班氏と碑文から見る貴州高坡苗族伝統社会の変遷―「卡下」地域―」では、「卡下」を管轄したもう一人の末端土司である青岩班氏を中心に考察し、更に現地調査で蒐集した碑文から、「卡下」の「公単公頌」地区、「蒙教蒙繞」地区の状況を分析した。それによると、「卡下」は青岩班氏をはじめとする土司らの影響力が大きく、かつ貴陽府直属でない土司の支配も受けた。「卡下」は「卡上」よりも土司による圧迫を多く受け、中国王朝側に自らの権益を保証してくれるように求めた。同時に中国王朝という「他者」に対して、「自我」を再覚醒させられ、自分たちの伝統社会のスタイル・システムの維持も強く求めるようになった。

すなわち、「卡下」の青岩班氏は、明末に大きな戦功により官位を継承した衛所土司であった。その土司像は中国王朝に極めて忠実で、その管轄地である「卡下」を含む苗族居住地に対しても、度重なる討伐を行った。そして、清朝の衛所改革により、「武力征服」の多かった武職土司から主に租税を徴収する末端土司となり、その勢力も弱まっていく一方であったが、「卡下」に対する不正な徴収が目立っていた。班氏が統治していた杉坪寨の碑文の分析で、この区域では清嘉慶年間になってから漢字文化を積極的に受け入れたことが分かった。その後、貴陽府に青岩土司を訴え、直接貴陽府に租税を納めることを要求した。青岩班氏の搾取に対抗するために、その統治下の「卡下」は、漢字という媒体を通して、中国王朝に請願する傾向がより強くなり、結果的に中央政権（国家）を承認し、自分たちは国家の中の一部という意識が強くなってきた。

班氏の管轄区域外の「公単公頌」地域で発見された高坡郷一帯の最も古い碑文である万暦年間の「万暦摩崖石刻跋」等の碑文を分析した結果、土地売買をめぐるトラブルに関して、苗族の「郷約」がその仲裁に入り、また「武挙」と共に「頭人」・「寨老」も租税の徴収に関わっていたことが分かった。次に「蒙教蒙繞」地域で雍正年間の碑文「碑記」が発見され、これにより高寨村辺りは水西安氏に属していた大平伐長官司宋氏の勢力が強かったこと、「イ」的要素を排除するような環境ではなかったことが分かった。

つまり「卡下」に関しては、多くの末端土司に管轄されたが、実際、碑文から読み取れたように、「卡下」の苗族伝統社会のリーダーは、租税の徴収だけでなく、土地をめぐる紛争の仲裁においてもその役割を果たしていた。郷約や武挙との共同参与もあり、中国王朝の政治体制内に組み込まれた傾向が強く見えるが、逆にその伝統社会組織も再認識させられ、強化された可能性がある。従って、「卡上」と違って、伝統社会組織を維持する、また伝統文化の核心となる祖先祭祀に関しても、従来の価値観が保たれていたと結論づけた。

では、「卡上」と「卡下」に区分された高坡郷一帯の高坡苗族は、何故一つのサブグループとして維持されてきたのか。第五章ではその伝統社会・伝統文化を維持する最も重要な祖先祭祀からその理由を究明した。

第五章「敲牛祭祖」からみる貴州高坡苗族伝統社会とそのアイデンティティ」では、「敲牛祭祖」から見られる漢人・漢文化と関わる点、すなわち「漢」的な要素に注目して、外部との接触の中で、「敲牛祭祖」がどのように改変され再構築されてきたのかを考察した。それによると、高坡苗族の「敲牛祭祖」は父子連名とそれに付属する親族関係を最重要視する文化体系がその根幹となっている。また漢文化をはじめとする異文化の相互浸透の産物であり、特に漢族が高坡苗族という境界に入り込む重要な儀式であると位置づけた。

高坡郷一帯においては、交錯する大小土司の統治に影響され、「卡上」・「卡下」の伝統文化に相違点が生じ、多様な様相を呈した。その伝統社会全体の維持、言い換えればサブグループとしての独自性を理解するためには、彼らの伝統文化の核心ともいえる「敲牛祭祖」がカギとなる。

高坡苗族は「敲牛祭祖」を行うことによって、「ジェイドン」という身分が得られ、死後の世界に初めてスムーズに入ることができ、祖先に認められると信じられている。これは苗族の祖先祭祀の中でも特徴的なものと言える。苗族の牛を供犠にする祖先祭祀に関する先行研究を踏まえた上で、筆者のフィールド調査のデータと比較しながら、「敲牛祭祖」のキーワードとなる「ジェイドン」、「搭橋」、「バヤ」、「ドンゴオ」を再検討した。その結果、漢化の度合いが異なる土司の統治によって、苗・漢の価値観が入り交り、内部の地域区分にそれぞれ大きく異なる様相を呈しているが、父子連名による「祭祀文」が「不変の核心」であることが分かった。

つまり、中国王朝の介入に伴う土司の統治及び漢人移民により、高坡苗族の「敲牛祭祖」は漢文化の影響を受けたが、苗族の名による父子連名の「祭祀文」という伝統の核心が固く

守られてきたため、その外の文化（漢文化）に対して逆に包容的であった。たとえ中央王朝の支配の浸透による影響を受けても、その独特のシステムを維持してきた。漢族は「敲牛祭祖」を通して、苗族の名を貰い、高坡苗族の輪に組み込まれて、高坡苗族に認められ、高坡苗族となっていく。このように、「敲牛祭祖」は「高坡苗族」を維持する役割を果たしており、高坡苗族のアイデンティティもこのような境界線によって保たれてきたと論じた。

以上、第一章から第五章まで「熟苗」の高坡苗族を検討した。では、「生苗」の場合はどうであったか。この問題について、付論でその解明を試みた。

付論「文化表象から見る苗族伝統社会の変遷とアイデンティティ―伝統服飾文化を事例に―」では、嘗て代表的な「生苗」の地域であった貴州省東南部の苗族に注目して、その重要な伝統文化の表象である服飾を切口に苗族社会とそのアイデンティティの変遷を検討した。それによると、まず清朝から民国まで、主に「改装」（伝統服飾を変える）という同化政策によって苗族アイデンティティの重層性が深まった。そして、現在において、服飾の位置づけが苗族の民族文化の再創造と民族アイデンティティの再構築に重要な役割を果たしている。つまり、現在「苗族」と呼ばれている人々は中華人民共和国成立前から継続する内部の多様性を保ちながら、社会主義政権によって構築された「苗族」という政治的枠組の中で、伝統文化を表出し重層的なアイデンティティを再構築している動態的状況であると検証した。

具体的には、まず、苗族にとって、祖先や移動の歴史を記録した代表的な模様は歴史記憶で、素朴な「われわれ意識」を作り出す。清朝では改土帰流が実施される中、強制的な改装、同化による内部からの改装革命、符号化した民族誌の創作があった。民国期も改装運動が続いた。様々なサブグループは異なる伝統服飾を持っていたが。そこに依拠した「われわれ意識」は、同化政策のような「他者」の圧迫を受けることで、共同の栄光・恥辱の歴史記憶を創り上げ、より強まっていった。一方、新たな苗族エリートが生まれ、地域を越えた目線で自分の民族を連携しようとする意識が芽生えたため、苗族アイデンティティの重層性が強化されていった。

次に中華人民共和国成立後、最も大きく変化した時期は改革開放後である。伝統服飾は「遅れた文化」から「経済的資源」・「政治的道具」へ、そして「苗族維持・発展に重要な伝統文化」として位置付けられた。伝統祝日としての「苗年」が政府主催の宣伝イベント化された中で、寨レベルの「苗年」における伝統服飾は、一般の苗族のアイデンティティを強化させていった。

文化表象としての伝統服飾のあり方と位置づけの変化が、苗族の伝統社会に大きな影響を与え、苗族文化の再創造と苗族アイデンティティの再構築に重要な役割を果たしている。社会主義政権によって構築された「苗族」という枠組の中で、「中国の苗族（中国人）」・「五十五少数民族の中の苗族」・「各地域の苗族」のように重層的に再構築されているのである。特に貴州東南部の「生苗」だった地域の苗族は、伝統服飾をはじめとする観光資源が最も注目されているため、政治的経済的環境が激変する中で、良く維持されている伝統文化も社

会・国家・国際社会と複雑に絡んで、衰退・破壊と再創造の間に揺らぎ動き続ける。苗族アイデンティティも更に複雑な側面を構築されていくことである。

終章では、これまでの内容を再度整理・確認した。

以上、本論文では、序章・付論・終章を含む全八章にわたり、苗族及び苗族アイデンティティの形成を検討するために、苗族の独自性と多様性をサブグループ次元で具体的に解明することを課題としてきた。その結果みえてきたのは、中国の苗族及びそのアイデンティティの形成において、中国王朝（国家）・土司・漢人社会という複合的「他者」による影響が最も大きいということである。そのため、漢字文献の影響、中国王朝による直接的政策実施、土司を通じての間接的統治を総合的に検討しなければならない。土司制度を実施し始めた元朝は、中国王朝の統治構図の中で「苗」の「境界」が形成され始めた重要な時期である。従って、特に元代から留意して考察する必要がある。

一方、苗族の伝統社会から中国王朝との関わりを見ると、伝統社会のリーダーはその伝統社会を維持するエリートとして、中国王朝の政治体制内のエリート層と伝統社会内部のエリート層に分け、苗族の伝統社会の維持、苗族アイデンティティに重要な役割を果たしてきた。

そして、苗族の多様性を考察するには、そのサブグループ（地域集団）を通時的かつ具体的に検討しなければならない。つまり、直接に統治を行った末端土司に注目し、その土司の民族的出自、中国王朝との関係、他の土司との関係など具体的な状況によって、支配下の地域社会に与えた影響も異なる。こうした視座から個別に考察することが不可欠である。高坡苗族の場合、同じサブグループであっても、中国王朝による土司の分割統治によって内部に文化的境界線が形成され、その多様性を呈している。これは苗族の多様性が形成された要因の縮図とも言える。しかし、苗族の「原初的」な伝統文化の核心となる部分にも目を向けなければならない。高坡苗族の「敲牛祭祖」は父子連名の「祭祀文」を中核として、そのアイデンティティを維持している。要するに、それぞれのサブグループの伝統社会・伝統文化における「変化」と「不変」が作り出されている。貴州東南部の中部方言集団も伝統服飾を通してそのような変遷が見られる。その中で、苗族の独自性と多様性が構成され、よって、「苗族」、「苗族サブグループ」の「境界」及び動態的な苗族アイデンティティが維持されているのである。

苗族のような内部に数多くのサブグループを抱える少数民族については、それぞれの伝統社会の変遷を通時的に丹念に分析してから、初めてその多様性と独自性を理解できると思う。一方、中国王朝（国家）・漢人社会以外に、他の民族による影響が多い場合、それも軽視できない。その流動的な「境界」に注目し、隣接する多様な「他者」の伝統社会の特徴をきちんと観察しなければならない。中国王朝（国家）・漢人社会をはじめ、それらの相互作用の分析を通して南部少数民族の独自性と多様性を理解し、その形成とアイデンティティを再考することは、華南世界ひいては東南アジア世界の多元性を解明する重要な作業であり、今後の課題である。